自校を知り、自分の将来に役立てる
～ノートルダムの歴史、徳と知教育～

S. ベルナルド岩井泰子, SSND

2020年6月5日

シスターベルナルド岩井泰子と申します。ノートルダム修道女会の修道女（シスター）です。ノートルダム教育修道女会は、School Sisters of Notre Dame　略して　SSND とよびますので、名前の後に SSND と書いています。

長年、ノートルダム女学院中学高等学校で音楽教師をやっておりました。その後、京都ノートルダム女子大学で「宗教音楽」を教えました。その時期は、大学のキャンパスミニストリーもしていました。現在は、ノートルダム学院小学校でピアノを教えています。

今日、みなさんが通っているこの大学についてお話できるのは、非常に嬉しいことです。

そして、みなさんがこの授業で何を学ぶかですが、タイトルは「自校を知り、自分の将来に役立てる」ですから、**単に歴史を学ぶだけではなく、自分の生き方に役立つポイントを見つけてもらえるといいと思っています。**

本日の講義のテーマ

① 創立者　マザー テレジア・ゲルハルディンガーの生涯

② ノートルダムの歴史と広がり

③ ノートルダムの精神

創立者 マザー テレジア・ゲルハルディンガー（1797－1879）

今日は、3つのテーマを順番に話していきます。

まず一つ目が、創立者　マザーテレジア・ゲルハルディンガーの生涯についてです。この写真の方が、南ドイツで200年近く前の1833年にノートルダム教育修道女会とノートルダムの学校を作られたのですが、どういう方だったのかを紹介します。

次が、ノートルダム教育修道女会の歴史と広がりです。マザーテレジア・ゲルハルディンガーが何を目指して会を創立したか、そして、ノートルダムは、学校や修道会をどのように世界中に広めていったのか、戦後、日本にもノートルダムの学校ができて、私たちの京都ノートルダム女子大学ができるのですが、それについても話します。

そして最後が、私たちが引き継いでいくべき「ノートルダムの精神」についてです。

創立者マザーテレジア・ゲルハルディンガーとノートルダムの話に入る前に、2つの重要なキーワードを復習しておきましょう。

一つ目のノートルダム（Notre Dame）、マリア様です。Notre Dameは、〈私たちの貴婦人〉という意味のフランス語で、欧米のキリスト教世界では、「聖母マリア」への敬愛の情をこめて広くこの呼び名が使われてきました。

二つ目が　Virtus et Scientia（ヴィルトス・エト・シエンツィア）。「徳と知」のラテン語で、本学のモットーです。

真ん中のマリア様は、初代学長のシスターユージニアが1948年にアメリカから持って来られた「マリア像」で、大学の一番、目立つところ（ユージニア館1階）に置かれています。

創立者　福者マザー テレジア・
ゲルハルディンガー
（1797－1879）

創立者　**福者**マザーテレジア・ゲルハルディンガーがお生まれになったのは1797年で、これは日本の**江戸時代**、徳川幕府の時代でした。お亡くなりになったのは1879年、日本では**明治12年**です。エジソンが電灯を発明したのがお亡くなりになった頃なので、まだ電灯のない時代に生きておられた方ということになります。

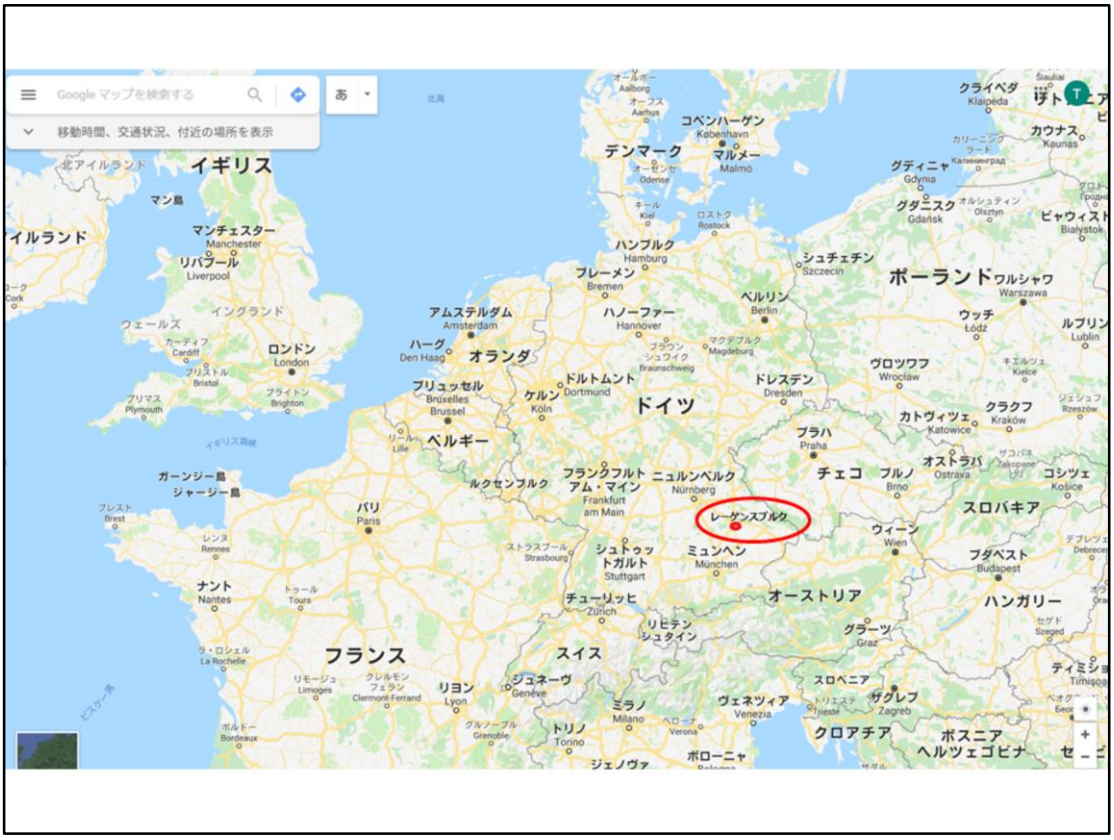
福者（ふくしゃ）というのは、カトリック教会において、死後にその徳と聖性を認められた信者に与えられる称号です。さらに上の称号に「聖人（せいじん）」という称号もあります。

ゲルハルディンガーというのが名字で、子どもの頃の名前はカロリーナでした。

米国ではノートルダム教育修道女会は、SSND で通じますが、ドイツでは、「どこの学校を卒業したの？」と聞かれて、ノートルダムと言っても通じません。そういう時は、「マザーテレジア・ゲルハルディンガーが創立した学校」だと言ったら、通じます。

実際、女学院の卒業生が短期留学でドイツにホームステイをして、「どこの学校を卒業したの？」と聞かれて、ノートルダムでは通じなかったけれども、「マザーテレジア・ゲルハルディンガーが創立した学校だ」と言ったら、そのお家のお母さまもドイツのノートルダムの卒業生で、ミュンヘンのノートルダムの学校に連れて行ってもらえたそうです。

みなさんも自分の学校の創立者である、マザーテレジア・ゲルハルディンガーのお名前は覚えておいてください。



マザーテレジア・ゲルハルディンガー（カロリーナ・ゲルハルディンガー）は、今のドイツの南の方にあった、バイエルン王国のレーゲンスブルグの近くの「シュタッタムホフ」で1797年にお生まれになられました。バイエルンはドイツ語読みで、英語ではババリアと呼ばれる地方です。

当時はまだ、ドイツ帝国はできていませんでした。各地方に王国があり、王様が統治している時代でした。

シュタッタムホフというのは小さい町ですが、ドナウ川を挟さむ石橋の向こうに、レーゲンスブルグという古い都があり、ここは今でも観光客がたくさん訪れる有名な町です。

今の地図のレーゲンスブルグを、赤く囲んでみました。

この写真が、レーゲンスブルグとシュタッタムホフの間をつなぐ、石橋です。間を流れているのが、ドナウ川です。

カロリーナ（マザーテレジア）の父親は、ドナウ川を航行する船の船長でした。当時の船にはレーダーなどはなかったので、船長は風の向きや空の雲の動きによって、船を安全に動かせるように、すべてを自分で判断しなければなりませんでした。つまり、人の命を預かる非常に責任の重い仕事でした。

ヨーロッパの川は国境を越えて流れていますから、外国に行く機会も頻繁にあり、近所の人に外国の話をする父親でしたから、娘のカロリーナもいつも外国の話を聞いていたでしょう。そして母親は、夫のビジネスパートナーでもあり、いつも近所の困っている人々を助ける優しい女性だったそうです。そして、敬虔なカトリック信者でした。

カロリーナは、その両親の一人娘として育ちました。父親に船に乗せてもらって外国に行ったこともありましたし、船に乗っている外国語を話す人々を実際に見て育ち、お父さんの船長という仕事を引き継ぎたいと考えていました。

ナポレオン軍の攻撃により
燃え上がるレーゲンスブルグの町

当時の社会は混沌そのもの：
フランス革命による戦争、産業革命、啓蒙思想

当時の社会は、混沌（こんとん。混乱していること）としていました。ヨーロッパでは、1789年に、自由・平等・博愛を旗印にブルジョア階級が権力をにぎり、**フランス革命**がおこっていました。この理念は良かったのですが、ヨーロッパ各地を戦争に巻き込み、軍人ナポレオンは自らを皇帝と名乗り独裁への道を歩み、混乱を引き起こしていました。

カロリーナ（マザーテレジア）も子どもの頃に、レーゲンスブルグが戦火で燃え上がっているのを自分の家から見たことを、生涯、忘れなかったそうです。

また、18世紀後半には**産業革命**がイギリスでおこっていました。それまでは手作業で生産されていたものが、工場で大量に生産されるようになり、人々の生活が劇的に変わり、ヨーロッパ全域で貧富の差が激しくなっていきました。

さらに、**啓蒙思想**がおこっていました。「理屈で説明できるか？」と問われて、説明できないものには意味がないと考えられるようになっていきました。「理屈で説明できない」という理由で、教会や修道会はだめなんだということになり、修道会はつぶされるようになっていきました。

教会や修道会の閉鎖が命じられる中で、カロリーナが通っていた16世紀にフランスの修道会が作った小学校も、小学校6年生の時に閉鎖になってしまいました。

学校創立の恩人：ウイットマン司教

（１７６０－１８３３）

レーゲンスブルグ　司教座聖堂

レーゲンスブルグの**ウイットマン司教**(1760-1833)は、混沌そのものの社会の中で、子どもたちの教育がないがしろになっていることに、心を痛めていました。そして、学校教育の必要性を痛感した司教は、非常に優秀な少女だったカロリーナ（マザーテレジア）に、小学校の先生になるように勧めました。

カロリーナは家業を継いで船長になるのが夢でしたが、尊敬する司教の勧めで、15歳で王立小学校の先生になる試験に合格して、王立小学校、つまり公立小学校の先生になりました。まずは公立学校の先生として、教育者としてのキャリアを開始したというわけです。

この学校では、当時としてはめずらしく、音楽・手芸・図工の授業が設けられていました。当時の学校教育は、読み書き・そろばん、つまり、算数と国語が主に教えられていました。しかし、カロリーナが教師をする学校では、知識を教えるだけでなく、意思を育てることを大切にした小学校だったので、他の学校から見学者が多く集まり、評判になりました。この学校での経験は、のちにノートルダムの学校のカリキュラムを作るのに役立ちました。

ウイットマン司教は、今も、レーゲンスブルグのお墓には常に花が絶えないほどの有名な方で、カロリーナの指導者であり恩人であり、友人でもありました。

カロリーナ(マザーテレジア)の恩人であり、友人でもあったのは、ウイットマン司教だけではありませんでした。

ウイットマン司教の教え子であり、後に音楽の都・ウィーンの宮廷付き司祭となった**ヨブ神父**(1767～1834)も、ノートルダム教育修道女会の創立に深くかかわってくださいました。ヨブ神父は、次のような言葉を残しています。

「もし、新しい、優れた世代が現れ、よい時代が来るとすれば、それはよく教育された若い女性たちによって始められます。 母親たちは人類の子孫を育み(はぐくみ)、教育する最初の人達です」

「ゆりかごを動かす手は世界を動かす」という古い格言があるのですが、聞いたことはありますか？女子教育の大切さを表している格言だと思います。

さらに、バイエルン国王の**ルードヴィヒ1世**(1786～1868)や、ウィーンの**カロリーナ皇后**(1792～1875)も、学校創立に協力してくださいました。このお二人は兄弟(兄と妹)で、マザーテレジアの恩人でもあり、友人でもありました。ルードヴィヒ1世は、マザーテレジアのことを、

「この婦人は、やりたいことを知っていて、それを言語化できる人物である」

と、高く評価していました。

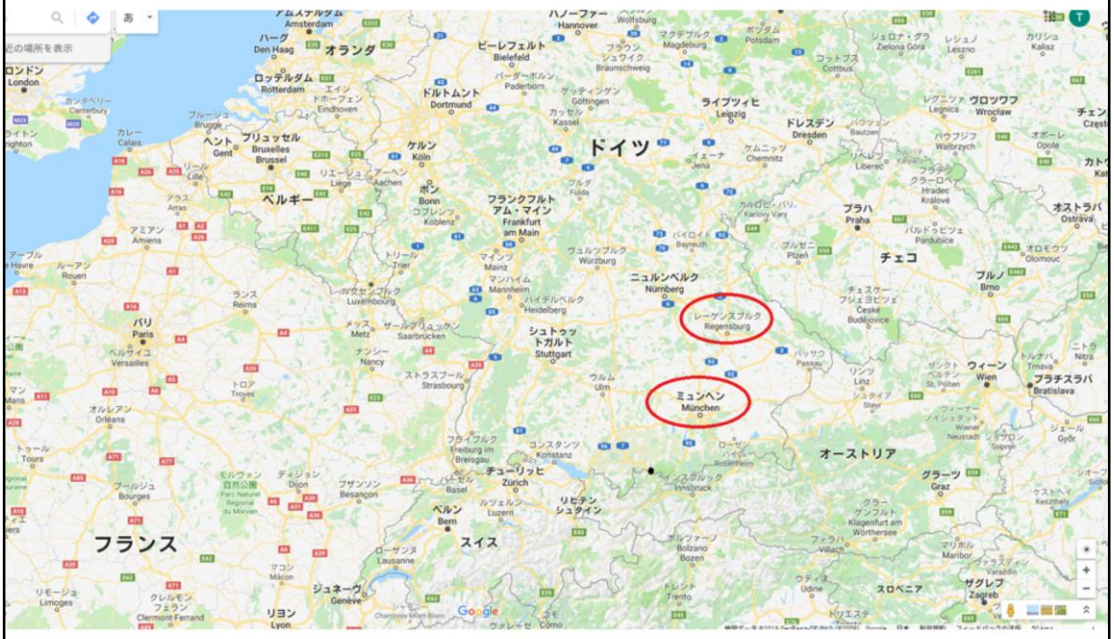
このように恩人たちに恵まれていたマザーテレジア・ゲルハルディンガーは、彼らの助言や財政的なサポートも受けて、36歳だった1833年に、ノートルダム教育修道女会を創立しました。

最初に本部が創立されて、最初の学校が建てられた場所は、レーゲンスブルグから北へ50kmほどの小さな田舎町、**ノインブルグ・フォルム・ヴァルト**でした。チェコとの国境に近い町で、ここはヨブ神父の故郷でした。当時は教育の機会も無く、することも無く、貧しく、孤児、路上生活者などの多い社会で、道徳的にも退廃していることを憂い、どうしても女子教育が必要との思いからこの地へ招かれたのです。

しかし、ここは辺鄙な田舎町だったので、教材は注文しても届きにくく、また、マザーテレジアは教員の養成に力を注いでいましたがその機会も無かったので、本部を移転することになりました。

そこで、創立から10年後の1843年に、本部を**ミュンヘン**に移すことにしました。ノインブルグ・フォルム・ヴァルトは本部ではなくなりましたが、学校は残しました。

ミュンヘンに本部修道会を移転（1843年）



ミュンヘンは、みなさんも聞いたことがあると思いますが、レーゲンスブルグから南に130kmほどのドイツの大都市です。当時も、バイエルン王国の中心地でしたから、教材も手に入りやすく、教育には最適な場所でした。マザーテレジアはここに優秀な教員を養成する学校を作りました。そして1843年、マザーテレジアは、ミュンヘンに本部修道院を建てました。

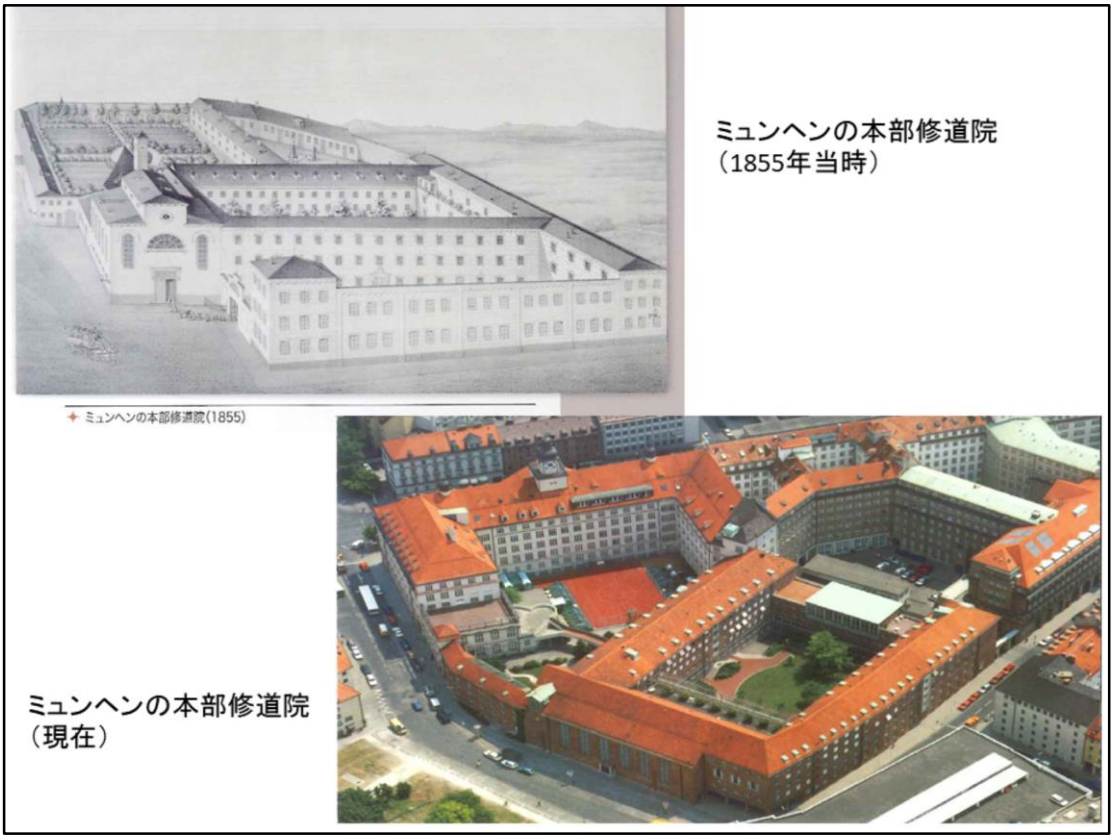
ウィットマン司教やヨブ神父が、ノートルダムの教育を始めたマザーテレジアへの手紙の中で言っていることを紹介しましょう。

「知的発達のみではなく、心と意思を育てることが大切です」
「知育は教育の本質的なことです。学校教育とは総合的な学校活動全体を含むものです」

「先生は生徒の模範となること。生徒はその模範に倣います」
「先生は子供たちが将来なりたいと思うような、喜びに満ちた人間の模範になりなさい」

「しつけの基本は、優しい厳しさである」
「神について生徒に話す以上に、生徒たちについて神に話しなさい」

みなさんの中には、将来、先生になる方もいらっしゃると思います。「優しい厳しさ」を持った先生になりなさいということが書かれていますね。そしてまた「喜びに満ちた人間の模範になりなさい」とも。優しさ、明るさはとても重要です。



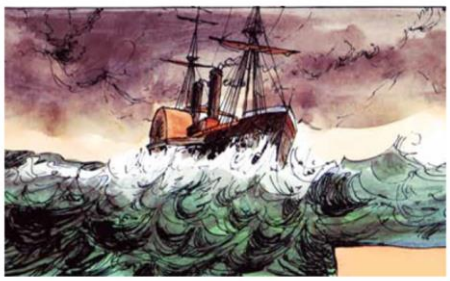
ミュンヘンに、1843年に本部修道院と学校を建てて、まず教員養成に力を入れました。独自の教材を印刷して利用していたそうです。

そして、歌唱、博物学、地理、歴史、絵画、裁縫を、教科の中に入れていたのは、非常に珍しいことでした。当時はドイツのみならず、世界中の教育は「読み・書き・そろばん（計算など）」でしたが、それに加えて、人間の「**美への感性**」を育て、「**情操を養う**」ことは重要だと考えました。

また、ノートルダムは女子教育の修道会でしたから、**女性が社会で自立**して（経済力を持って）生きるために、音楽・手芸・図工の力が役立つと考えたのです。さらに、**「知」と同様に「徳」を育むこと**が、社会で責任ある人生を送るのに必要であるというのも、ノートルダムの教育方針でした。

今でも、ミュンヘンにノートルダムの本部修道院がありますので、みなさんがミュンヘンに行かれるときは、事前に連絡した上で、訪ねてみられるとよいと思います。行くのであれば、学校法人ノートルダム女学院のシスター和田理事長に、連絡してください（大学内にシスター和田の理事長室があります）。シスター和田はローマで世界中のノートルダムのシスターたちと一緒に働いていらっしゃったので、ミュンヘンのシスターも紹介してくださると思います。

アメリカ大陸へ（１８４７年）



５人のシスター方と渡米

ドイツのノインブルグに修道会ができたのが1833年ですから、それからまだ14年しか経っていない1847年に、新天地アメリカから、ドイツからの移民のために修道会の会員を派遣するようにという依頼が届きます。

その時代、ドイツも含めてヨーロッパの人は、政治的、経済的、宗教的、その他の様々な理由で、新天地アメリカ大陸へ渡ったのですが、そちらでの生活は困難を極めていて、伝染病や飢餓で亡くなる人も多く、その結果、孤児になる子どもも少なくなく、教育どころでない状況が続いていました。

アメリカでは、先に入植した英語圏の人々が力を持っていて、ドイツ移民は虐げられていました。そこで、ドイツ移民を助けるという目的で、バイエルンの国王ルードビィヒ一世からお金も預かって、創立者マザーテレジア・ゲルハルディンガーを含めた5人が、大西洋を渡ることになります。

この時は海は大荒れし、普通なら船で3週間程度で行けるアメリカに、一か月以上かかり、マザーテレジアは嘔吐と高熱に苦しみ、もうここで死んでしまうのかと思ったそうです。

そのように苦労してアメリカのニューヨークに到着したのですが、到着先の方に「私たちは呼んでません」と言われるなど、シスターの受け入れ態勢がなくて幻滅に次ぐ幻滅の日々だったそうです。

マザーテレジアは、日記にこう書いています。**『今は見ること聞くことのすべてが自信を無くさせます』** それでも引き下がらずに、アメリカ大陸を進んでいきました。

当時の移動は、牛車や馬車でしたし、宿泊も丸太小屋で、近所の婦人が作ってくれたスープを感謝して飲んだそうです。スプーンは一つしかなくて、５人のシスターが一口ずつ飲んで回したという記録が残っているほどです。

最終的には、バイエルン国王のルードヴィヒ１世からの金銭的なサポートも得て、アメリカのメリーランド州のボルティモア（ワシントンDCの北側）に、修道院を持つことができました。

マザーキャロライン・フリス
アメリカにおける総長代理

ミルウォーキー　マザーハウス　（1850年）

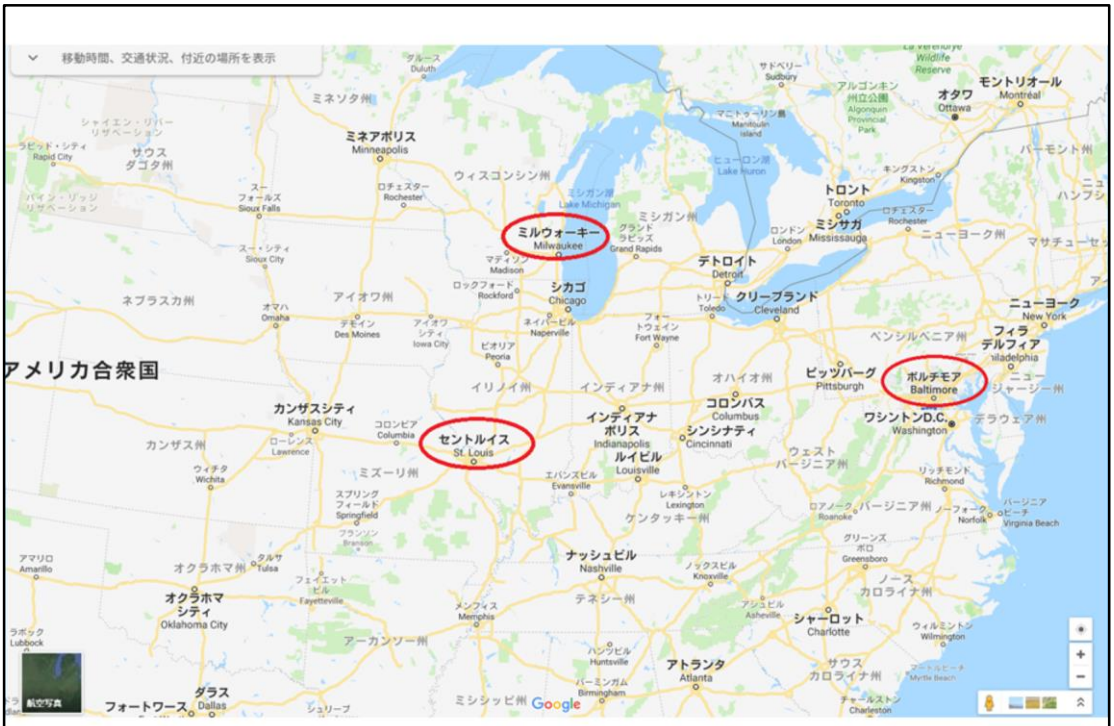
アメリカに渡った5人のシスターの中に、 **マザーキャロライン・フリス**（1824-1892）という、若いシスターがおられました。当時はまだ23歳だったので、大荒れの大西洋を渡る船の中でも元気だったそうです。

マザーテレジアは、翌年にドイツに戻りましたので、このマザーキャロライン・フリスが若くして（25歳で）、アメリカの初代総長代理となります。彼女はお父さんがドイツ人、お母さんがフランス人だったということもあり、異国のアメリカでも活動的で、ノートルダム教育を発展させていきます。彼女のお名前をとって、本学の寄宿舎（学生寮のこと）は、キャロライン寮という名前になっています。

そして、渡米から3年後には、ウィスコンシン州のミルウォーキーにアメリカの本部を置き、学校を建てました。

もともとは、ドイツ移民のための学校を作る予定でアメリカに渡りましたが、行ってみると教育を受ける機会のない子どもたちの貧しさを目にして、ドイツ人だけではなく、ボヘミア人、ポーランド人、黒人、アメリカ先住民族なども受け入れる児童養護施設（昔のことばでは孤児院）や学校を作ることになりました。

日本では1868年からが明治時代ですから、これは江戸時代の頃の出来事です（ペリーの黒船来航が、1853年）。



メリーランド・ノートルダム大学（米国メリーランド州ボルチモア）

マウント・メリー大学 （米国ウィスコンシン州ミルウォーキー）

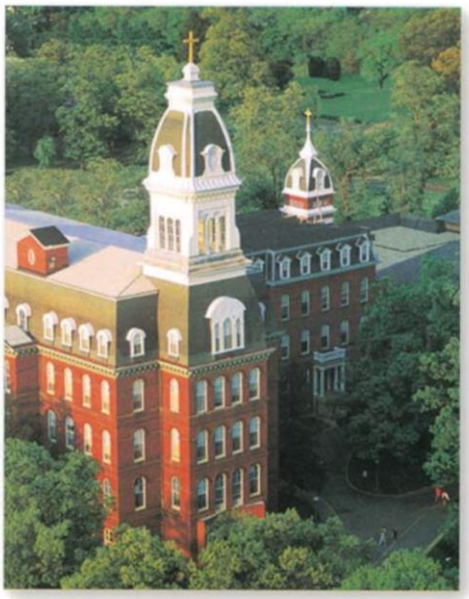
その後、北アメリカでの活動は大きく広がり、1873年には東海岸のメリーランド州ボルチモアに、メリーランド・ノートルダム大学(Notre Dame of Maryland University)」を設立します。これはアメリカ合衆国における**最初のカトリックの女子大学**でした。

そして1913年には、ウィスコンシン州ミルウォーキーにマウント・メリー大学(Mount Mary University)を設立し、これは**ウィスコンシン州の最初の4年制カトリックの女子大学**でした。

米国初のカトリックの女子大学（1873年）

●マウント・メリー大学（アメリカ・ミルウォーキー）

マウント・メリー大学
（米国ウィスコンシン州ミルウォーキー）



●メリーランド・ノートルダム大学（アメリカ・ボルチモア）

メリーランド・ノートルダム大学
（米国メリーランド州ボルチモア）

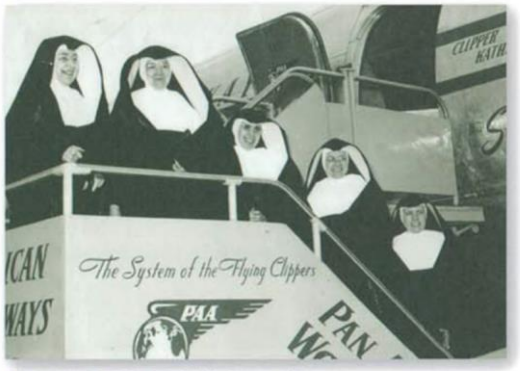
これが、その二つの大学の写真です。どちらの大学に対しても、本学は1989年から1990年にかけて、姉妹大学協定と交換留学協定を結んでいます。

これらの大学で教えているシスターが、本学に滞在されることもあって、2019年の前期には、マウント・メリー大学からシスターリンダマリーが来られて、英語の授業を教えていましたね。

みなさんの中にも、ここに交換留学に行かれる方もいらっしゃることでしょう。

セントルイスから日本へ（１９４８年）

最初に京都に派遣された４名のシスター方



● 1948 年 11 月、飛行機で日本に向かうシスターたち

（一番左が管区長のシスター）

Ｓ．リチャードアン、Ｓ．ヴィヴィアン、Ｓ．メリーポーロ（女学院第２代校長）、Ｓ．ユージニア（女学院初代校長、女子大初代学長）

さて、ドイツからアメリカにノートルダムのシスターが行かれて100年後の1947年に、今度はアメリカのミズーリ州セントルイス管区へ、日本へのミッションの依頼がありました。1945年（昭和20年）には日本は第二次世界大戦（太平洋戦争）で敗戦して、日本の都市部は焼け野原になっていて、非常に貧しい時代でした。そして、日本の教育は戦前と戦後で変わったために、混乱していました。

「戦争で荒廃した日本の子どもたちのために、学校を建ててほしい」

という依頼が、姫路のスクート会と京都などを中心としていたメリノール会からあり、後者の依頼に応えることになり、セントルイスから、日本に4名のシスターが京都に派遣されました。４名のシスターが京都に着いたのは、1948年11月のことでした。

左の写真の一番左端が管区長で、４人のシスターを連れてこられました。

右の写真の一番左の**シスターリチャードアン**は、お若くて元気一杯でした。その右が、大学で長く英語を教えられた**シスターヴィヴィアン**で、モットーは、「信仰・健康・頑固」と、ご自分で言っておられましたね。その横が、**シスターメリーポーロ**で、音楽が専門でした。オーケストラができるほどたくさん楽器を持ってこられて、近所の子どもにバイオリンを教えられました。そして、一番右が、**シスターユージニア**です。博士号を持っておられた（当時女性の博士号取得者は非常に少なかった）ので、女学院中学高等学校、学院小学校の初代校長、そして大学の初代学長を務められました。本学のユージニア館は、初代学長のお名前から命名されています。

ミズーリ州セントルイス管区というのは、アメリカの中西部で、そこからサンフランシスコまでは鉄道で移動して、サンフランシスコからは飛行機でした。

日本は当時、連合軍の統治下にあったために、シスター方の日本滞在の許可も、連合軍からもらったのですが、その時に、「日本には食べものがないから、2年分の食料を持ってくるなら来てもよい」と言われて、実際に自分たち4名の2年分の食料を船で日本に送られたそうです。

日本は夏に高温多湿になり、食べものには虫がわいたそうですが、そのようなものを食べながら、日本の子どもたちのための学校設立に奮闘してくださいました。

1948年からの日本の最初の修道会は、京都市左京区の鹿ケ谷（ししがたに）の純日本建築に一部洋風デザインを取り入れた和洋折衷建築の建物でした。今、ノートルダム女学院中学高校がある場所です。

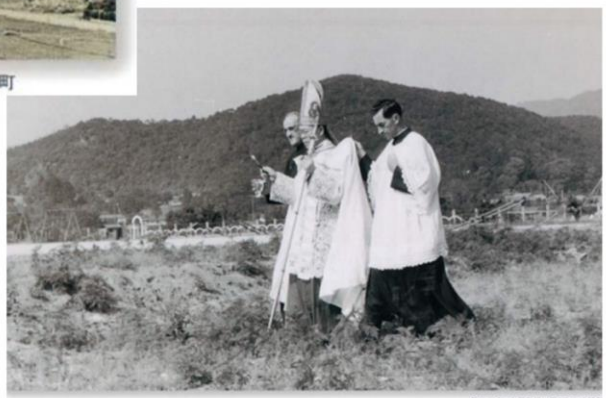
山が迫っていて紅葉が非常に美しい場所ですが、冬は非常に寒いんですね。家の中はすべて、暖房・冷房のセントラルヒーティングが完備されていたアメリカから来られて、非常に寒い思いをされたと思います。火鉢（ひばち）を囲んで、シスター方が日本語を勉強している写真が残っています。

電柱に貼られた「英語教えます」「バイオリン教えます」という貼り紙を見て、近所の人々が子どもを連れて珍しそうに修道院にやってきたところから、日本のノートルダムの教育は始まっています。

この鹿ケ谷の地に、1952年にノートルダム女学院中学が開講し、1953年にノートルダム女学院高等学校が開校します。

中学、高校、小学校、大学の開校

●1952年、大学用地を設定した頃の京都市左京区下鴨南野々神町



●1960年、大学敷地で行われた地鎮祭

ノートルダム女子大学
の開校（1961年）

1952年（昭和27年）　ノートルダム女学院中学校開校
1953年（昭和28年）　　同　　高等学校開校
1954年（昭和29年）　ノートルダム学院小学校　開校
1961年　ノートルダム女子大学　　開校（1999年に、京都ノートルダム女子大学に改名）

中学、高校を鹿ケ谷に、野々神町（北山通）に、小学校、大学の順番に、学校を建設していくのですが、大学の開校には、学界、経済界のそうそうたる人々の支援を得ています。

学界からは、京大の元総長の鳥養利三郎氏、京大総長の平沢興氏、ノーベル賞受賞者の湯川秀樹氏などです。そして経済界からの強力な支援者の一人が、倉敷の大原美術館の第2代理事長の大原總一郎(1909-1968)氏で、ノートルダム女子大学設置委員会が設置された1959年当時、ノートルダム女学院中学高等学校の父母の会会長であったこともあり、大学創立の財政確保においても多大な功績を残されています。

そしてついにノートルダム女子大学が誕生したのは、1961年（昭和36年）でした。2021年に創立60周年を迎えます。

当時、京都市にあった女子大学は四年制が2つ、短大が7つでした。そして、京都市はもちろん、関西地区でも最初にできたカトリック系の四年制大学でした。

日本からネパールへ（１９８３年）

さて、今日の授業では、

「ノートルダム教育修道女会、ドイツで創立」（ヨーロッパ、世界に発展）
↓
「ドイツからアメリカへ」（アメリカ、世界に発展）
↓
「アメリカから日本へ」（日本での発展）

を中心に紹介してきましたが、アメリカから日本にミッショナリーがやってきた1948年から35年後の1983年に、日本人のシスターが4名、ネパールに渡り、学校を建設しています。

最初は、55名の入学者からスタートした学校は、40年近く経った今では800名を超える、幼稚園から高校までの立派な学園に成長しています。上記の流れに、

「日本からネパールへ」（ネパールでの発展）

も加わり、ノートルダムの教育は世界に広がっています。

小学校、中学・高校、大学の校章

小学校　女学院　大学

Virtus et Scientia

徳と知

最後に、ノートルダムの校章（シール）を紹介しておきましょう。

これは、アメリカの初代総長代理のマザーキャロライン・フリスが、アメリカで1885年ごろから使われ始めた校章を、日本をはじめとする各国で使っているものです。

真ん中が本（聖書であり、学問の書）ですね。そこには、Virtus et Scientia（ヴィルトス・エト・シエンツィア）、日本語にすると「徳と知」と書かれています。

それを支えている葉っぱは、左側が棕櫚（シュロ）で勝利のシンボル、右側が月桂樹（ゲッケイジュ）で誉れ（ほまれ）を意味します。本学の中庭にそれぞれの木が植えてあり、名前の札がついていますので、探してみてください。

そのうえに、**J** と **M** が重なっている文字が見えますね。これは、Jesus（イエス様）と Maria（マリア様）の頭文字です。

小学校、女学院の校章は、丸で囲んでいます。丸は、一致です。これらを一つにまとめる、という意味です。

今日は、「ドイツで創立」→「ドイツからアメリカへ」→「アメリカらか日本へ」→「日本からネパールへ」を中心に紹介してきましたが、ノートルダムの教育は、世界30ヶ国以上にひろがっています。

このスライドには、「世界にひろがるノートルダム教育」と書かれていますが、「世界に繋がる（つながる）ノートルダム教育」とも言えます。同じ組織が母体になっていますから、まさに「つながっている」のです。

これで、私の話を終わらせていただきます。

創立者マザーテレジア・ゲルハルディンガーが教育の中で何を大切にしていらしたかを思い出して、みなさんがこれから受けられる「ノートルダムの教育」をこれからの人生のバックボーンにしてください。そして、世界に羽ばたいてください。